

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

資料4-25

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴・治療状況等)(重 篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 り過ぎるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンE	ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を是 正する。				0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)					末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の機能 に対して、効 果がないの に月余にわた って漫然と 使用すべき ではない。	錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止
ミネラル 成分	レ-アスバラキ ン酸マグネシ ウム	カリウム並び にマグネシウ ムは細胞内 に多量に存 在する陽イ オンで、細胞 の生理的機能 の維持に重 要な働きを示 す。 レ-アスバラキ ン酸カリウム とレ-アスバラ キニン酸マグネ シウムの等量 混合物は、 KCl、MgCl2な どの無機塩に 比べ組織移 行性が高く、 電解質平衡 異常時のカリ ウム、マグネ シウム補給に 優れた効果を 示す。	カリウム保持性利尿剤・アン ジオテンシン変換酵素阻害 剤・アンジオテンシンII受容体 拮抗剤(高カリウム血症)、 活性型ビタミンD製剤(高マ グネシウム血症)	心臓伝導障 害(大量投 与)		頻度不明(胃 腸障害、胸や け、下痢、嘔 吐、腹部膨満 感、けん怠 感、熱感)		重篤な腎機能障害 (高カリウム血症)、 副腎機能障害(高 カリウム血症)、高 カリウム血症又は 高マグネシウム血 症	腎機能低下あるい は腎機能障害、急 性脱水症、広範囲 の組織損傷(熱傷、 外傷等)、高カリウ ム血症があらわれ やすい疾患(低レニ ン性低アルドステロ ン症等)、高マグネ シウム血症があら われやすい疾患、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、低出生体重児、 新生児、乳児、高齢 者		大量投与で心臓 伝導障害	長期投与で 高カリウム血 症又は高マ グネシウム 血症	原則として、レ-アスバラキ ン酸カリウムとして1日225 ~750mg(3~10錠)を2~3 回に分経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 高齢者では減量投与	下記疾患又は 状態における カリウム補給 (マグネシウム 欠乏を合併し ている疑いの ある場合)降圧 利尿剤、副腎 皮質ホルモン、 強心配糖体、 インスリン、あ る種の抗生物 質などの連用 時、低カリウム 血症型周期性 四肢麻痺、心 疾患時の低カ リウム状態、肝 疾患時の低カ リウム状態、重 症嘔吐、下痢、 カリウム摂取 不足及び手術 後
クエン酸鉄ア ンモニウム	フェリセルツ	本剤は水溶 液中で水プロ トン(信号を増 強させ、消化 管造影剤とし ての有効性 が示されている。				0.1~0.5%未 満(下痢)、 0.1%未満(嘔 気、嘔吐、食 欲低下等)、 頻度不明(胃 部不快感、腹 部膨満感)	0.1%未満(過 敏症)	ヘモクロマトーシス など鉄過剰症の治 療を受けている [症状が増悪]、 鉄剤に過敏症	消化性潰瘍、潰瘍 性大腸炎、眼局性 腸炎等の腸管疾 患、高齢者、妊婦又 は妊娠している可 能性のある婦人、 小児				通常、成人にはクエン酸鉄 アンモニウムとして600mg (1包)を300mLの水に溶か し経口投与する。 なお、必要に応じて 1,200mg(2包)まで増量す る。	腹部磁気共鳴 コンピュータ 断層撮影にお ける消化管 (胃、十二指 腸、空腸)造影

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

資料4-25

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
	グルコン酸カルシウム	カルチコール末	抗テタニー作用、低カルシウム血症改善作用	リン酸エストラムステンナトリウム(リン酸エストラムステンナトリウム(これらの薬剤の効果が減弱))	強心配糖体(強心配糖体の作用を増強)、テトラサイクリン系抗菌剤・ニューキノロン系抗菌剤・エチドロン酸ナトリウム(これらの薬剤の効果が減弱)、非脱分極性筋弛緩剤(これらの薬剤の筋弛緩作用が減弱)	高カルシウム血症・結石症(頻度不明)		頻度不明(食欲不振、悪心・嘔吐、便秘、胃痛、けん怠感)				高カルシウム血症、腎結石(腎結石を助長)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着を助長)、リン酸エストラムステンナトリウムを投与中(リン酸エストラムステンナトリウムの効果が減弱)	活性化ビタミンD製剤を服用、強心配糖体の投与を受けている、高カルシウム血症があらわれやすい病態の患者、高齢者			高カルシウム血症となる可能性がある。食欲不振、悪心・嘔吐、便秘、筋力低下、多飲多尿、精神症状等があらわれ、さらに重篤になると不整脈、意識障害が出現する。高齢者では高カルシウム血症が起こりやすい。	長期投与により高カルシウム血症・結石症が現れることがある。		グルコン酸カルシウムとして、通常成人1日1~5gを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高カルシウム血症があらわれやすいので、用量に留意すること。高齢者では用量に留意すること。	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善 テタニー、テタニー関連症状 小児脂肪便に おけるカルシウム補給	
	炭酸カルシウム	炭カル錠「ヨシダ」	沈降炭酸カルシウムは不溶性カルシウム製剤の1種で、制酸作用を呈し、また吸着作用もあわすので胃潰瘍及び胃酸過多症に制酸薬として用いる	テトラサイクリン系抗菌剤・ニューキノロン系抗菌剤・エチドロン酸ナトリウム・鉄剤(これらの薬剤の吸収を阻害し、効果を減弱)、高カルシウム血症改善イオン交換樹脂製剤(これらの作用を減弱)、活性化ビタミンD製剤(高カルシウム血症があらわれる)、大量の牛乳(milk-alkali syndromeがあらわれる)、ジギタリス製剤(ジギタリス製剤の作用を増強)			頻度不明(高カルシウム血症、アルカローシス等の電解質失調、悪心、嘔吐、便秘、下痢、胃腸の反動性分泌等)、頻度不明(長期・大量投与で腎結石、尿路結石)	頻度不明(過敏症)			甲状腺機能低下症又は副甲状腺機能亢進症(病態に影響)	腎障害、心機能障害、肺機能障害、便秘、高カルシウム血症、高齢者			長期・大量投与で腎結石、尿路結石		沈降炭酸カルシウムとして、通常成人1日1~3gを3~4回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	下記疾患における制酸作用と症状の改善 胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)			

ビタミン含有保健薬(ビタミン剤等)

製品群No. 43

資料4-25

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量に関するもの			過剰使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
アミノ酸成分	アミノ酸エチルスルホン酸(タウリン)	タウリン散「大正」	胆汁酸排泄促進作用を有する。 ・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、ALP、γ-GT、プロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロール比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合組織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。 ・心筋代謝改善作用、心筋保護作用 ・実験的慢性心不全による死亡率低下				0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振)	0.5%未満(過敏症)									アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うつ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うつ血性心不全
	レーアスパラギン酸ナトリウム	ナトリウム塩はなし																
	レーシステイン	ハイチオール錠80	レーシステインは、生体内代謝系において、SH供与体としての役割を果たし、SH酵素の activator(賦活剤)として作用する。皮膚代謝の正常化、抗アレルギー、解毒などの作用により各種皮膚疾患に応用される。放射線を照射した動物の延命(マウス)、白血球減少抑制(ラット)、脾障害の防護(マウス)など				0.1~5%未満(悪心)、0.1%未満(下痢、口渇、軽度の腹痛)		高齢者					放射線障害による白血球減少症の場合は、通常、放射線照射1時間前より投与を開始すること。			1.通常成人下記1回量を1日2~3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 レーシステインとして1回80mg ハイチオール錠40 2錠、ハイチオール錠80 1錠、ハイチオール散32% 250mg 2.通常成人下記1回量を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 レーシステインとして1回160mg ハイチオール錠40 4錠、ハイチオール錠80 2錠、ハイチオール散32% 500mg ・高齢者で減量。	1.湿疹、尋麻疹、薬疹、中毒疹、尋常性ざ瘡、多形性渗出性紅斑 2.放射線障害による白血球減少症